

東南アジアにおける生薬の比較研究

(第V報)

—— シンガポールの中薬 (5) † ——

新田 あや*・吉田 集而*

A Comparative Study of Crude Drugs in Southeast Asia, Part V

——Chinese Crude Drugs in Singapore (5)——

by

Aya NITTA and Shuji YOSHIDA

I は じ め に

前報において、薬材学に記載されていないシンガポールの中薬、約140品目の個々について、その系統（中国系、インド系あるいはマラヤ系）を検討した。

本報では、まず前報での検討をもとにして、薬材学に記載のなかったシンガポールの中薬の系統を概観する。次に薬材学に記載されているが、シンガポールでは収集できなかった中薬についてその特徴を検討する。さらに、Gardens' Bulletin（以下GBと略記する）記載の中薬群との比較においては、その40年間に脱落した中薬の特徴、新たに加わったと考えられる生薬の系統について検討する。また、GBとシンガポールの中薬を比較するとき、やや気になる二、三の中薬がでてきた。これらは、ともに中薬としては重要なものでもあるので、別にとりあげ、少しく検討を加えておいた。

II 薬材学の中薬との比較

既報のごとく、薬材学の中薬との比較は、中国本土の中薬と、やや特殊な状況にあると考えられる東南アジア華僑の用いている中薬との同時代的比較として捉えている。

(A) シンガポールの中薬の系統

薬材学に記載されていないシンガポールの中薬、約140品目について前報で検討したが、こ

* 京都大学薬学部生薬学教室

† 「シンガポールの中薬(4)」『東南アジア研究』(1973) Vol. 11, No. 1, pp. 107-129.

れらをおおまかにまとめると次のようである。

(1) マラヤ系の薬物はほとんど吸収されていない。わずかに4品目がそれと推定されるにすぎない。すなわち *山樹茹 (*Trametes sanguinea* (Fr.) Lloyd), *黄藤根 (*Arcangelisia loureirii* (Pierre) Diels), 楊桃花 (*Averrhoa carambola* L.), *板榔花 (*Areca catechu* L.) ぐらいである。有骨稍 (*Bidens* sp.) は、中国系文献にもみられるが、マラヤから取りいれた可能性が高いと考えられる。

シンガポールの中国人にとってマラヤの薬物は決して身近なものでなく、ほとんどかえりみられなかったと思われる。そして、このことは、あるいは東南アジアの中薬におけるシンガポールの特質の一つであるかもしれない。

(2) インド系に属すると推定される薬物も決して多くはない。中国系文献にみられず、インド系文献のみにみられるものをあげると、*白头翁 (*Polycarpaea corymbosa* Lam.), *白蓮花 (*Nelumbo nucifera* Gaertn.), *無根草 (*Cassytha filiformis* L.), *茺蔚子 (*Corchorus capsularis* L.), *芙蓉根 (*Hibiscus rosae-sinensis* L.), *山竹壳 (*Garcinia mangostana* L.), *紫地丁 (*Gentiana loureirii* Griesb.), *甜老葉 (*Tylophora* sp.), *武靴藤 (*Gymnema* sp.), *緑茵陳 (*Origanum vulgare*), 金牛草 (*Veronica* sp.), *九乾菜 (*Dicliptera chinensis* Nees), 金劍草 (*Rubia cordifolia* L.) など13品目があげられるにすぎない。しかも、これらとてまちがいなくインド系であると断定できない。しかしながら現在のところ、これら薬物がシンガポールにおいてインド系薬物から中薬の中にとりこまれた可能性は高く、その際おそらくはシンガポールのインド商人の手を通してとりこまれたのであろうと思われる。

(3) 中国、インドの両文献にみられる薬物が40品目ほどある。これらがいずれの系統に属するのかを決めることは容易なことではない。これらがシンガポールの中薬として、入りこむ経路としていくつかの可能性はある。例えば (a) 比較的古い時代に中国からインドあるいはインドから中国と伝播しており、その後インドあるいは中国（この場合、インドよりも中国からの可能性のほうがはるかに高いと考えられるが）からシンガポールに持ち込まれたもの。(b) 伝播したのではなく、相互に独立して使用されており、いずれか一方からシンガポールに導入されたもの（この場合においても、インドよりは中国からの可能性のほうがはるかに高いであろう）。(c) 比較的新しい時代にインドからシンガポールに、そしてシンガポールから中国に伝えられたものなどが考えられる。

これらのうち、(a) あるいは (b) の可能性が最も高いのではないかと想像しているが、その根拠はない。今はインドおよび中国の両方で使用されているとのみ記しておき、別の機会に検討してみたいと考えている。

* 印は GB に記載のあるものを示す。

(4) 中国およびインド系文献のいずれにもみられない薬物が10品目ある。これらの中には、シンガポールの中国人の手によってつくり出されたと思われるものもある。たとえば、雪梨皮（ナシの果皮）は文献上は果実、松雷粒（マツカサ）は同じく種子、葉、材、樹脂。菜豆壳（ササゲ類の成熟果実の果皮）は同じく種子で、これは食用にもなり、DEPMP (Dictionary of Economic Products of Malay Peninsula) によれば、華僑達はこの種子からめん類をつくるので、成熟果皮が副産物として大量に出るといふ。これを利用したのかもしれない。

また、おそらくは中国本土で使われていたものが、シンガポールに入ってから、生薬名はそのまま残り、実際の薬物が変わってしまったものもあるだろう。たとえば、金不换 *Lycopodium serratum* Thumb., 千里光 *Lespedeza cuneata* (Du Mont de Courst G. Don), 古苏草 *Lespedeza* sp. などはこの学名は中国系、インド系、マラヤ系のいずれの文献にも薬物としては記載されていない。

(5) 残りの約60品目は、中国から移入されたものと考えられる。これらの多くは漢方処方用薬（漢薬）というよりはむしろ中国南部の嶺南地方の民間薬が大部分を占めている。実際の薬店には、漢薬のようなものだけでなく民間薬も用意されている点は注目してよいであろう。

さて、このように検討してみると、薬材学に記載されていなかったシンガポールの中薬のほんのわずかな部分がインドおよびマラヤ系に属するのみで、大部分は中国系生薬であった。その中国系生薬の中でも、多くは嶺南地方の民間薬であった。筆者らはこのような検討をはじめの前には、もっと多くのインド系またはマラヤ系薬物の取り込みを予想していた。しかし、その予想に反して、多くは薬材学に記載されている生薬で（つまりそれらは中国系生薬である）、薬材学に記載されていないシンガポールの中薬すら、大部分は中国系生薬であった。中薬は想像以上にまとまりのある、あるいはかたい結びつきのある一群の生薬であると考えられる。

(B) 移入されなかった中薬

シンガポールの中薬は、中国本土で用いられている薬物のすべてが移入されているわけではない。すなわち、薬材学記載の中薬の約40%はシンガポールではみられなかった。

これらの移入されていない中薬を通観してみると、いくつかのやや特徴的な生薬群があることに気付く。

(1) 食品類：大蒜 (*Allium sativum* L.), 辣椒 (*Capsicum annuum* L. およびその変種), 高粱 (*Sorghum vulgare* Persoon), 蒔蘿子 (*Anethum graveolens* L.), 香圓 (*Citrus wilsonii* Tanaka), 甜杏仁 (*Prunus armeniaca* L.), 咖啡 (*Coffea arabica* L., *C. liberica* Bulliard), 甜瓜子 (*Cucumis melo* L.), 南瓜子 (*Cucurbita moschata* Duchesne var. *melonaeformis* Makino)

(2) 殺虫剤：魚藤 (*Derris elliptica* Benth., *D. malaccensis* Prain その他同属植物), 除虫菊 (*Chrysanthemum cinerariaefolium* Visiani)

(3) 劇毒薬類（あるいは製剤原料）：顛茄根, 顛茄草 (*Atropa belladonna* L.), 莨菪叶 (*Hyos-*

cyamus niger L.), 曼陀罗叶 (*Datura stramonium* L.), 吐根 (*Cephaelis ipecacuanha* A. Richard.), 蘿芙木 (*Rauwolfia verticillata* (Laur.) Baillon), 古柯叶 (*Erythroxylum coca* Lam.), 洋地黄 (*Digitalis purpurea* L.), 波希鼠李皮 (*Rhamnus purshiana* DC), 菸叶 (*Nicotiana tabacum* L.), 毒扁豆 (*Physostigma venenosum* Balfour), 番木鱈 (*Strychnos nux-vomica* L.), 阿片 (*Papaver somniferum* L.), 羊角拗 (*Strophanthus divaricatus* (Lour.) Hook. et Arnott), 麦角 (*Claviceps purpurea* Tulosne), 海葱 (*Urginaea maritima* (L.) Baker), 斑蝥 (*Mylabris cichorii* Fabricius, M. Fabricius), 青娘 (*Lytta caraganae* Pallas) など。

これらのうち、(3) の劇毒薬類のほとんどは葯材学に記載されているものの、もともとはヨーロッパ系の生薬に属するものである。すでに述べたごとく、葯材学記載の生薬のすべてを中葯としたが、シンガポールにみるかぎり、これらは実際的には、中葯の中に入っていない。現在の中国での市場で、これらの生薬がどのようにあつかわれているのかを検討した上でなければ明確にはいえないが、あるいは先の仮説はとりさげなければなるまい。

さらに(1) にあげた食品類のほとんどは、シンガポールでは中国系あるいはインド系の食糧(料) 品店で取り扱われており、中葯葯行では扱っていなかった。

また、葯材学では動物類および鉱物類生薬が多く記載されているにもかかわらず、シンガポールで少ないのは、前報でも述べたように、高価なために充分収集できているとはいえないが、やはり実際にもそう多くは用いられていないのではなかろうか。

III GB の中葯との比較

GB の中葯との比較は同一市場における40年間の変化を目的にしている。40年前には430品目であったものが、現在581品目となっている。これは約90品目の薬物が脱落し、かわって約240品目の薬物が増加した結果である。

(A) 脱落した中葯

脱落した中葯の中で、特に目立ったものに食品類がある。他のものについてはそれほどまとまった特徴は見出せなかった。次にそれら食品類としてまとめられるものをあげておく。

舊菘白 (*Allium Bakeri* Regel およびその近縁種, 根茎), 白菜 (*Brassica chinensis* L., 葉), 無花果 (*Ficus* sp. 果実), 燈茶 (*Ilex latifolia* Thunb., 葉), 西花粉 (*Ipomoea batatas* Lam. 根のでんぷん——さつまいも粉), 胡桃 (*Juglans regia* L., 種子), 正決粉 (*Pteridium aquilinum* Kuhn, 根茎のでんぷん——わらび粉) および榧子 (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. 種子) である。

(B) 加わった中葯

40年の間に240品目が増加した。そのうちで葯材学に記載されているものが、約130品目あり、これらは中国系のものとみて間違いはない。残りの約110品目については前報で詳細に検討

してある。さらにⅡの(A)においてそれぞれの系統を述べた際に、*印をつけ、それらがGBに記載のあることを示した。すなわち、*印の生薬は、シンガポールの中薬のうちで薬材学に記載のないもので、既に40年前にあったものを示している。そして*印のないものはその後増加したものを示している。

まず、マラヤ系の生薬の3品目は既に40年前にあった。さらにインド系の生薬と考えられるものは11品目が既にあり、新たに2品目が増加した。インドおよび中国の両方にみられないものは、40年前には6品目、後に6品目加わっている。今後さらにこの類の生薬が増加するのかもしれない。残りのものの多くは中国系であり、しかもそれらは40年前にはほとんどみられず、最近移入されたものである。

このようにみえてくると、増加した最大のグループは薬材学記載の中薬であり、次に中国の民間薬であった。そしてシンガポールの中薬にわずかに吸収されたインドおよびマラヤ系の生薬も、実は多くは40年前に既に定着しており、その後にはほとんど移入されていない。

(C) 問題のある中薬

ここでとりあげる生薬は、附子および烏頭類 (*Aconitum* spp.), 人參 (*Panax ginseng* C. A. Meyer) および当帰 (*Angelica sinensis* Oliver) である。

附子・烏頭類は中薬における最も優れた鎮痛剤の一つで、シンガポール市場には加工品も含めて川烏、草烏、焙付片、克付子、灼天雄、明天雄・克天雄および白付子の8品目の異なった商品があった。ところがGBにはこの類の生薬は全く記載がない。ただし白付片として *Arisaema* sp. (Araceae) が記載されている。これは収集もれかもしれないが、現在のシンガポール市場をみる限りでは収集もれとは考えにくい。附子・烏頭類は使い方が大変難しく、使いこなすには相当の熟練を必要とするため、当時の中医達は意識的に使わなかったためか、あるいは処方組み方が異なるために、附子・烏頭類を必要としなかったのかもしれない。この点の疑念はいまだに残っている。

一方、高貴薬に属し、かつ頻用される人參類はGBにおいては種粉先参(白参)およびその加工品である麗参顔(紅参)のほかに洋参(*Panax quinquefolium* L.)を記載しているが、筆者らが調査した中薬薬行には、人參はみられず、数等級にわけられた洋参のみみられるだけであった。しかし現在のシンガポールの中薬薬行に人參がないわけではなく、高貴薬を扱う特定の商店があり、人參はその店で扱われているようである。後日マレーシア各地の生薬調査を行なった際に“参燕鹿桂”と大書した看板をあげている商店に気付いたが、おそらくはこのようなところで入手できるものと思われる(参燕鹿桂は人參、燕巢、鹿茸、官桂の意)。

当帰は現在、シンガポールの薬行に少なくとも3種類があり、うち2種類には洋参のように等級がある。すなわち単に“当帰”とっているものは、細根を除き、外皮を取り去り、うすくカットした後にローラーにかけられ、黄白色のせんべい状となったものをいい、等級はなく、

漢方の処方にしたがって使われる（だいたい婦人病）。このほかに“当帰頭”と“当帰尾”があり，これらもやはり細根は除かれ，洗って外皮のところどころを除去した後，そのまま乾燥されたもので，やや硬く，前者は根頭部と主根からなり，後者は枝根である。調査した薬行の“当帰頭”の最上品は直径約 2cm で，1 本が 1 マラヤドル（約120円）もする。当帰としては大変高価である。これらの用途は感冒の頭痛であるという。

GB には西歸鼓頭の生薬名が出ており，次のように記載されている。“シンガポールでは ‘Sai kwai tow’ ——西歸頭—— といっており，その性状は根頭と分岐した太い根からなり，屈曲しやすく，ゲンチアナ根のようであり，用途は婦人病関係である”。この記載から判断すれば，現在の“当帰頭”や“当帰尾”はこれに該当せず，むしろ延展されたのしするめ状になる前の“当帰”の元の形を想像させる。一方本邦における当帰の形状は，これらと異なり，主根に細根をからませて乾燥したものであるが，その用途は主として婦人病（特に補血，鎮静）である。

薬材学によれば商品としての当帰は形の上で 3 種類ある。すなわち (1) 胡首归は通称归头といい根頭と主根からなり，(2) 归尾あるいは归腿尾は枝根あるいは主根の先端，(3) 原枝归は全当帰で主根および枝根からなるという。つまり本邦のものはすべてこの (3) に属する。しかしながら東南アジア市場の中薬店では，ほとんどが帰頭と帰尾にわけられ，さらに帰頭のほうはローラーにかけて，のしするめ状とされたものがある。

また 3 種類の当帰は薬材学によれば，用途が少しずつ異なっている。すなわち“归头能出血，身能养血，尾能行血，全用和血”と記載されている。しかし，これらはいずれも補血あるいは活血で，特に婦人病に使用されるが，感冒頭痛の効用はない。

そこでさらに薬材学および中薬志を用いてこの点について詳細に検討したものが表 1 である。表 1 は当帰の基原植物を中心として，これに関係のあるセリ科（およびウコギ科）植物の根および根茎類生薬を選び出し，それぞれの生薬の正品およびローカル的に使用されるもの——地方品——を整理したものである。正品には**印を，地方品には*印をつけておいた。

さて当帰の基原植物のうち正品とされるものは，*Angelica sinensis* Oliver (= *A. polymorpha* Maxim. var. *sinensis* Oliver) であるが，地方的には同属あるいは近縁属植物が少なからず使われている。中薬志によれば，中国産当帰として *A. anomala* Lallem, *A. laxifoliata* Diels, *A. tschiliensis* Wolff., *A. valida* Diels および *Heracleum candicans* Wall, 薬材学によれば *A. laxifoliata*, *A. grosseserrata* Maxim., *A. miqueliana* Maxim., *A. megaphylla* Diels および *Peucedanum decursivum* Maxim. (= *Angelica decursiva* (Miq.) Fr. et Sav., 大井：日本植物誌, 1965) があげられている。

ところで，これらの植物の根あるいは根茎のあるものはまた別の生薬としても使われている。すなわち *A. anomala* は白芷の正品（中薬志，薬材学），*A. laxifoliata* は独活の正品（中薬志），および前胡の地方品（中薬志），*A. megaphylla* は独活の正品（中薬志），*Peucedanum*

表1 中国産当帰および関連生薬

Origin		当 帰	前 胡	独 活	白 芷	芍 薬
Angelica	anomala Lallem	*			**	
	citriodora Hance		*			
	dahurica (Fisch.) Benth. et Hook.			*	**	
	formosana H. Boiss				*	
	grosseserrata Maxim.	*	*			*
	laxifoliata Diels	*	*	**		
	megaphylla Diels	*		**		
	miqueliana Maxim.	*				
	porphyrocaulis Nakai et Kitag.			*		
	pubescens Maxim.			**		
	sinensis Oliver (=A. polymorpha Maxim. var. sinensis)	**	*			*
	tschliensis Wolff.	*				
	valida Diels	*				
yabeana Makino (=A. genuflexa Nutt.)				*		
Carum buriaticum Turcz.			*			
Conioselinum univittatum Turcz.						*
Heracleum	candicans Wall.	*				
	hemsleyanum Michaux			**		
	lanatum Michaux			*	*	
	scabridum Franch.		*		*	
	tillifolium Wolff.		*			
Ligusticum	bracylobum Franch.		*			
	sinensis Oliver					*
	wallichii Franch.					**
Peucedanum decursivum Maxim. (Angelica decrusiva Fr. et Sav.)		*	**	*	*	
praeruptorum Dunn			**			
Selinum vaginatum C.B. Clarke			*			
Aralia cordata Thunb....Araliaceae...				**		

** 正品 * 地方品

decursivum は前胡の正品（中薬志）あるいは地方品（薬材学）および独活（中薬志）と白芷（薬材学）の地方品となっている。また当帰の正品は A. sinensis=A. polymorpha var. sinensisであるが、その母種である A. polymorpha は前胡（中薬志）および芍薬（薬材学）の地方品である。以上のように生薬当帰の基原植物から文献により芍薬、前胡、白芷、独活の4生薬が引き出されたが、これら5生薬の基原植物における関係は図1に示した通りで、相互に重複している。すなわち同一基原植物が地方により、あるいは加工法により、2種類以上の生

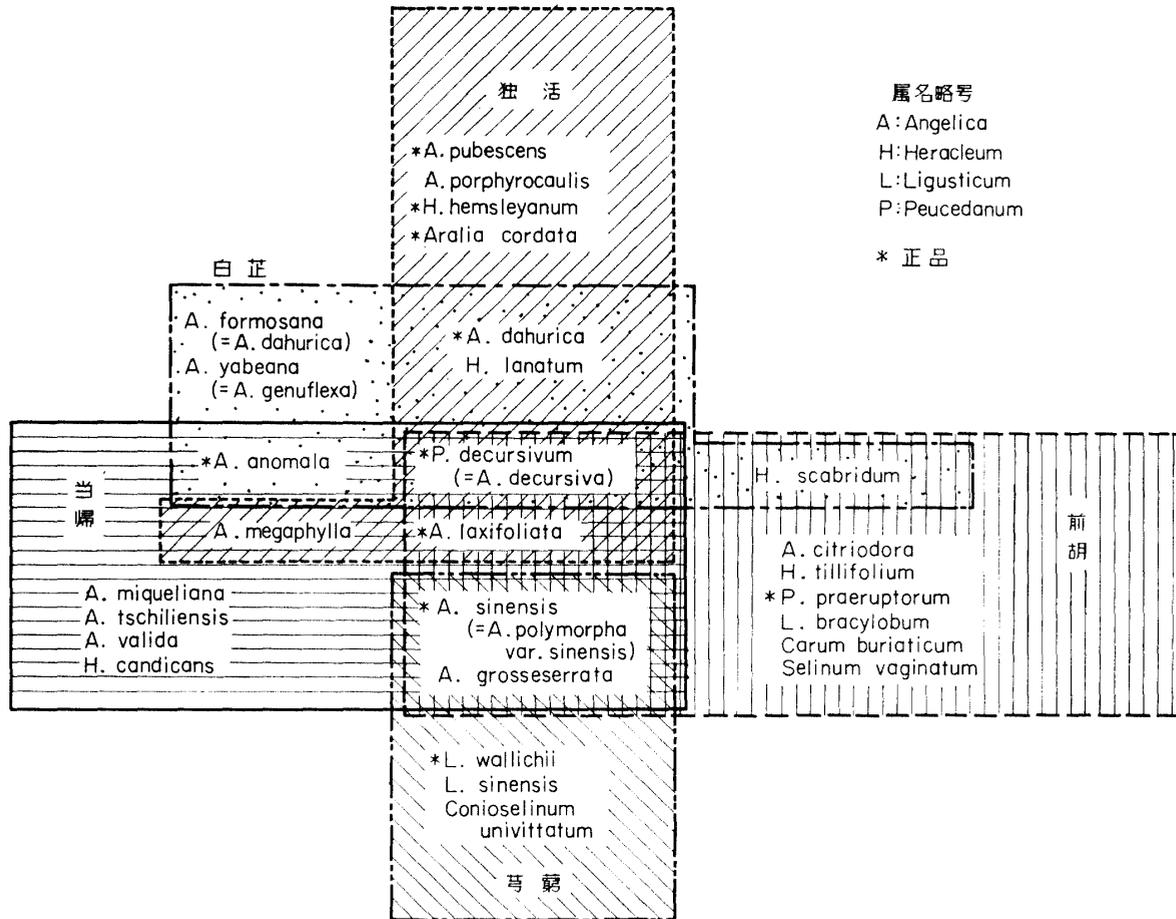


図1 中国産当帰および関連生薬との関係

薬となることがある。図1において、1基原植物につき一定面積を与えてあるので、面積が大きいほど、その生薬は多種類の植物によって構成されていることを意味し、重なっている部分の植物はそれだけ多種類の生薬として、仕上げられることを示している。そして横軸は、左方は主として *Angelica* 属の植物からなり、右方はさまざまな属の植物からなる。また縦軸については、上部ほど植物の外形が大きくなっている。

このようにみると、独活と芍药とは明確にその植物の大きさでわけられ、混同されない。一方、当帰と白芷は *Angelica* 属に傾き、前胡はさまざまな属からなっている。

前胡はその基原植物の多様性においては一番であり、ついで当帰である。反対に芍药は小さいバラエティーしかなく、その変異の幅は極めて小さい。また独活を除いて、他の4生薬は基原植物が相互に重なりあっているので、そのためそれぞれの生薬の間で混同の起こる可能性が非常に高いといえる。

次にこれらの生薬の用途についてみると、当帰は婦人病、鎮静に、芍药は婦人病、鎮痛に、前胡は風感、鎮咳に、白芷および独活は感冒、頭痛に効ありと記載されている。

通常われわれは生薬名に対応する植物があり、そしてそれに薬効が対応していると安易に了解している。しかし実際には同一基原植物から複数の生薬が仕上げられ、また同一生薬名に対応する基原植物が、しばしば複数であるケースがある。そのような場合、薬効あるいは用途はどうなっているのでしょうか。おそらく用途は基原植物との結びつきが固く、生薬名が変わったからといって用途も変わるケースは少ないと思う。

シンガポール市場で“当帰”と称される生薬が、普通に考えられている当帰の用途と異なる使い方をされていても、ここに述べたように、基原植物が相互に他の生薬と関連しているとき、それらの生薬の用途内であれば、そのようなことが起こるのも当然のことではないだろうか。

セリ科植物の根および根茎からなる中薬は11種類あるが、そのうち基原植物が他の生薬と無関係なのはわずかに柴胡、明党参、羌活の3種類で、他の8種類は相互に関連している。さらに本邦あるいは朝鮮半島などのセリ科植物の根あるいは根茎からなる生薬は、より多くの地方的な基原植物を包含しているため、その基原植物、生薬名および用途の間で混乱が生じている可能性が非常に高い。それゆえに、セリ科植物の生薬に関しては細心の注意が必要であり、それらの基原植物の同定には形態的のみでなく、化学的研究も非常に重要であろう。

IV お わ り に

本報をもってシンガポールの中薬に関する報告はひとまず打ち切ることとする。シンガポールの中薬(1)～(3)においては個々の中薬の基原の同定ないしは推定をおこなった。(3)～(5)においては各市場の生薬を群として比較するための方法の検討を兼ねて、GB および薬材学記載の中薬との比較を試みた。

このシリーズの中でもっとも重点をおいたのは、個々の生薬の起原の同定である。この作業ができないかぎり、次の行程に進むことはできない。この研究のもっともベースになるものである。しかし、これは同時にもっとも難しい問題でもあった。生薬名から文献記載の起原を引き出し、それをあてるといった簡単な操作ではない。常に現物にもどり、逐一、さまざまな可能性を考慮しながら同定した。そのため、文献の起原と異なるものもでてきた。一方では、全く文献的には照合できないものがある。これらについては、そのものからだけで推定した。それらを可能にするのは、植物学的知識によることが多い。筆者らの知識にはやはりかたよがりがあり、精粗さまざまな同定ないしは推定を行なっている。今後、この点に関してよりいっそう努力したいと考えている。

次に、シンガポールの中薬(3)で、薬材学およびGB との薬物の対応づけを行なった。その際、いろいろのレベルでの対応づけが考えられる。筆者らのとった対応づけはその中でもっとも荒いものであった。特に、同名異物のとりあつかい方には問題があり、再度検討してみた

い。また、系統を探る際には、synonymの問題が予想以上に手数がかかった。特にインド系文献と、中国系文献とではおうおうにして用いられる属名が異なっていた。いちおうこれをこなしたとしても、常に時間軸を考慮しなければならない。この問題を正面からとりあげるならば、おそらくは膨大な文献考証作業を覚悟しなければならない。それは、筆者らの手に余るものであるし、本来の目的とは異なるので、この程度でおさめておきたい。

薬材学およびGB記載の中薬との比較は、予想していた通り適切でない場合がやはりでてきた。たとえば、薬材学に記載があり、シンガポールの中薬にはみられなかった中薬の場合である。一つは、いわゆる洋薬のあつかい方。そして、食品類や殺虫剤などが、中国本土の薬店に実際におかれているのか、はなはだ疑問である。また、地方的な民間薬を薬材学は拾っていないようであるが、この点も実際の薬店の状況と異なっているかもしれない。比較の対象とするものは、やはり同じような手続きによって収集された生薬群でなければ比較することに無理が生じ、結果として適格な比較像が描けないと考えられる。

このような比較をしてゆく中で、個々の生薬の用途を聴取していないことが痛切に反省させられた。もともと、薬はそれ自体で存在するものではない。薬には、それに対応する用途——すなわち病気がある。薬は用途あるいは病気とセットとなるものである。実際の比較において、中薬群同志での対応づけ、あるいはその中薬の系統をさぐる際に、重要な要素であった。

たとえば、同一起原の薬物が用いられていたとしても、その用途が異なればどうであろうか。系統の問題においても、起原・用途ともに一致しなければ、その系統をひいているとはいえないのではないだろうか。しかし、用途ないしは病気について調査することは、容易なことではない。特に、薬物の用い方のシステムにまで立ち入ろうとすれば、問題はより複雑化する。また、たとえ用途のみを聴取するにしても、中薬の場合、常に処方方を考慮しなければならず、個々の生薬の用途を簡単に記載することができない。今回の調査では、用途を聴取する試みをしないではなかったが、予想通り困難であったし、一方では、本邦を広い意味での中薬圏内であり、ある程度は予測しえるであろうと考えて省略してしまった。今後の調査においては、何らかの方法を用いて聴取しなければならないと考えている。

このシリーズでは、引き続きクアラルンプールの中薬、クチンの中薬などを順次、同様の手続きで報告してゆく。そして、これらの市場の中薬群とシンガポールの中薬群との比較を試みるつもりである。また、今回の調査では、シンガポールとペナンにおいてインド系生薬約150品目を収集している。これらは、中薬とは異なった医学システムで用いられている薬物であり、同様の手続きで比較検討してみたいと考えている。

謝 辞

終りにのぞみ本研究資料の収集に際し、種々便宜をはかって下さった京都大学薬学部名誉教

授上尾庄次郎先生, シンガポール大学 Dr. H. Keng, 日本薬学会, 大阪市日盛株式会社鄭岳氏
ならびに呉健行氏, シンガポール益興貿易公司李懷徳氏ならびに黄徳祥葯その他の方々に感謝
いたします。あわせて, 出国に際し御便宜をはかっていただいた京都大学薬学部木島正夫教授
ならびに宇野豊三薬学部長に感謝いたします。

<参 考 文 献>

- 南京葯学院葯材学教研組編:『葯材学』(1961).
中国医学院葯物研究所等編:『中葯志』Vol. I~IV (1960).
D. Hooper: Gardens' Bulletin (1929-30) Vol. VI, pp. 1~165.
新田・吉田:『東南アジア研究』(1972) Vol.9 (4), pp. 597~614; Vol.10 (1), pp. 105-120; (2) pp. 335-350.
新田:『東南アジア研究』(1973) Vol. 11 (1), pp. 107-129.

(訂 正)

『東南アジア研究』 10巻1号 (1972), p. 108

S 585 白芝花と S 225 密蒙花は相互に生薬名がとりちがえられていましたので, 次のように訂正いたしま
す。

	誤		正	備考
S 585	白芝花†	→	S 225 密蒙花	
S 225	密蒙花	→	S 585 白芝花	……葯材学では密蒙花